

三十二 賢者を尋ねて

以前の読書ノートをめくって回想つまり再考を始めた話はずでした。一九九〇年にメモの分量が多かった一つが柄谷行人著『終焉をめぐる』である。たぶん書評に促されて読んだのだろう。書棚に同じ人の当時の著作があるところを見ると、『終焉をめぐる』の議論に教えられるところが多くて、そのあと、ほかの書物にも手を伸ばして取り組んだのだと思われる。読書ノートのすぐあとに『探究Ⅰ』と『探究Ⅱ』があり、次の年には『批評とポストモダン』を読んだことが記されている。書棚には最近までの著作のいくつかも並んでいる。

この人は、最初に注目された作品が夏目漱石論(論点の一つは意識)だったというから、文芸批評家として出発したわけだ。実際、『終焉をめぐる』も、文学関係の雑誌などに寄稿された評論を集めたものである。そのときのメモを読んでもみると、当時のわたしになじみの薄かったことが多くて書き写したのだと推察できる。その筆法には独特の趣があって、それらにも刺激を受けたのだと思う。しだいに慣れると、中立的な意味で富永伸基のいう「くせ」に当たると了解したように記憶する。

さて、『終焉をめぐる』を取り出して開いたら、切り抜いた紙片がはらりと出て来た。

案の定それは書評だった。書評子は言っている。——この評論集には、シヨック療法にでもたとえられそうな意見が、何度も提出される……。それをすこし子細にたどつてゆくと、いまわれわれが生きているのがどういう時代であるか、ある明確な考えに出会うことになる……。 (書名になった) エッセーには、「一九八九年の世界的事態」のなかで、時代を考える視角が示される。歴史が終わったのではなく、「世界資本主義」が新しい転換の時代に入ったという意見は、示唆的である……。云々。——

四半世紀経つてみて、柄谷行人がまさに一九八九年に進行中の歴史を的確にとらえていた、と判明する。日本でこれほど明瞭に事態を把握していた人は少ないだろう。彼の人の知性は全開中だったと形容したいほどだ。あの時点でそういう書物に出会えたことは、わたしにとって幸運だった。多くのメモをとり、考えて、その後の状況の展開を観察する眼を養う助けになったと思う。

文芸批評や評論は、とりあげたいいくつかの書物やことから対象に考察を進める。著者の関心が広ければ、考察はさまざまなことに及ぶ。評論集『終焉をめぐる』はまさしくそのような書物である。それぞれの評論は基本的に文学作品と作家を論じたものだが、人

間と社会にかかわることをもつと深いところから考えようとする。そして、それを時代の状況のなかでとらえようとする。そこには、それまでの柄谷行人の思索がたどりついた思想が織りこまれている。過去の哲学者や思想家や作家の思考に踏みこんで、その重要な概念を用いて議論を展開する。しかも、概念をありふれた平板な理解ではなく、もつと深い意味を取り出して先鋭に用いる。先の書評子はそれをショック療法という言葉で表現したのである。ここにはたいへん貴重な思索がある、と思う。

先ほど挙げた四冊の本を手にとって書かれた時期を勘案してみると、柄谷行人の思想が一九八〇年代に一つの構成体になっていったことが分かる。時代の状況と向き合おうとする思索家は、ちょうど思考力が強まったかのように、意識的に重要な問題に取り組んでいたと見える。世界の思潮あるいはポストモダンの思想と格闘すれば、思考は広がらざるをえない。『探究Ⅰ・Ⅱ』の考察は哲学に向かう。もともとマルクスの影響は深いようだ。しかし、一般的なマルクス主義者の考え方に組せず、一九七〇年代以来の世界の思潮の問題意識から、マルクス自身の思想を掘り起こそうとする。その姿勢が一九八〇年代の社会をとらえるのに働いている。そして、最後の『批評とポストモダン』は、文芸批評を軸としながらも、探究の成果を駆使して広く思想の問題を縦横に論じているのだ。

といったようなことが、わたしの表面的な見立てである。読書ノートのメモを頼りに、

その著作の内容について、ここでもっと考えるべきだが、論題は多岐にわたり、その議論もそのように広くて深いとすれば、知識も思惟の力も及ばないわたしがそれを適切に語ることはむずかしい。書物を読みなおす機会があるまで、ひとまずそれを宿題として措いておこう。

柄谷行人にはその舌法に必ずしもそぐわないまじめで学習的な態度がある。二冊の『探究』という書物の名にそれが表われている。哲学的な考察は、デカルト・スピノザ・カントといった時代を画した古典にまで及び、そこから現代的な意味を汲み取って、現代の思想に組み入れてそれを豊かにしようとする。

わたしは、柄谷行人の学びの姿勢に大きな影響を受けて、それまで齒が立たないと思っていた哲学書を探究する気になったようだ。読書ノートの少しあとにカントの『実践理性批判』が登場する。そしてスピノザの『エチカ』が、いずれもたくさん書き抜きをしていた。それらを読みながら、わたしは薄れた記憶を呼び戻そうとした。もちろん、個々の文章の記憶がよみがえるはずはない。ただ、とくに印象深い文になにかしら懐かしさを感じるだけである。それでも、わたしがカントとスピノザに引かれるわけは、二人の偉大な哲人がとても善良で真摯だということにある、と確認した。今では過去の偉大な先人達の

著作を少しは読んだと言えるけれども、そのなかでもスピノザやカントほどの善知識は少ないのだと分かる。現代では、この二つの書物が与えてくれるものを知識と呼ぶのはむずかしくなった。それでもわたしは、それを自分の血肉にしたいと願うような種族の人間のようにだ。再読することを思い立った。

時代順を考え、また『実践理性批判』は『純粹理性批判』と合わせての方がよいだろうと思い、『エチカ』から読むことにした。するとその前に、スピノザがその方法を考えた序章とも言うべき『知性改善論』から始めなければならぬ。わたしは、大事だと思う文章にうねってしまう棒線（日本語訳だからアンダーラインではない）を鉛筆で引く。本を大切に扱う人にしかられるだろう。やっけて行くと、関心はあまり変化していなくて、以前に線を引いていたところが今度も重要に感じられ、新たに線を入れるところは少ない。今では書き抜きは習慣になって、雑録である日記帳に日々の感慨などと並べて書く。線でマークしたところをぜんぶ書き抜くのは手間がかかるから、とくにえらんだ文章だけである。こうして、以前の読書ノートと重なるの多い抜き書きができた。書き写したからといって、それらを覚えられるわけではない。以前はまた読みなおすことがあるだろうと思っていたのだが、こんどは読みなおす機会は来ないだろう。それでも書き抜きながら復唱すれば、心にかすかにでも留まるものがあるだろうと期待してのことである。賢い人はこんなこと

はしないだろう。

倫理を数学の体系のように語るといふ企ては、スピノザだからこそのできたのだと思う。キリスト教社会から異端視されている上に、ユダヤ人社会からも破門された人は、人間の普遍的な価値を追求することによって、その境遇を選ぶことになった。それでも、善良な人は、みずから考究してたどりついた「真理」を、すべての人々が受け入れることができるように、必然的な論理の体系に組み立てる必要を感じたのだと推察される。だれも真似ることのできない高貴な心性の持ち主だったと思う。

形而上学の限界を知って以後、批判の方法を發展させて以後の人間は、第一原理として神をおいて考察を始めることを放棄した。ところがスピノザは、時代が移行する前の、ほとんどだれも神を否定しない社会に生きていた。賢明で敬虔な人は徹底的に考えたのだから。神という言葉を棄てないで、その限りない作用は自然そのものにあるとして、究極まで進んだ。スピノザにはエチカすなわち倫理を破棄することができなかったから、神は、自然の無限で必然的な作用として倫理を貫徹するとしたのだ。そうして、その体系の第一部は「神について」となった。

第二部の精神の本性、第三部の感情の本性については、数学的な形式がよそよそしい印

象を与えるが、この人がどれほど人間について思索を巡らしたかが現われ、その徳がにじみ出ている。事実において徳の体現者だったことは、その書簡集（こちらも再読せよという声が聞こえる）で確認できる。もちろん、スピノザは人間が感情に支配される生き物だということをよく知っていた。その克服しがたい感情をどのように克服するかが、第四部の課題である。人並み優れた知性にも、神に頼らずに克服する道は、理性によって妥当な認識に至ることにしか見出すことはできない。みずからのために、そしてほかの人々のために、スピノザの全力をあげての奮闘が文章と行間ににじんでいる。第五部は、人間の知性を高らかに掲げて、人間を自由に至らしめる道を指し示す。神という言葉がふたたび現われるが、それは人間の希求する「永遠」の言い換えだと思われる。

再読したわたしは次のように考える。現代に生きるわたしは、『エチカ』をそのまま受け入れることはできない。それでもなお、現代でもそうすることがよく生きることだと思うから、ほとんどすべてのスピノザの希求を承認したい。しかし、いくつかの考えには共感できない。スピノザは神の人格性を抽象化して自然の必然性の中に移しこんだけれども、なお人格性の残存を感じる。そして、たとえば、動物を意のままに利用することを容認し、人間以外に自然に存するものを保存するようなことは必要ないとする言明に違和感を覚

える。これらは、ゴータマ・シッダールタの世界観と対立的である。つまり、スピノザの思惟は、彼の置かれた社会の世界観から自由でなかったことを物語る。

今日の人間は、世界を分節し構成する仕方と概念が人間社会のあり方と無関係ではないこと、人間とその精神のとらえ方もそれに依存することを知った。世界は複雑にからまつた多層的なもので、人間が整然とした体系に整理して認識することさえ困難なのだ。そして、科学的自然観は、スピノザが棄てきれなかつた精神の永遠性にかかわることもあきらめるように勧告する。わたしは途方にくれる。しかし、スピノザのように人間の理性を頼りにする道をすすむほかはない、そうすべきだと思う。

わたしが師とすべきスピノザは、人々の信じる神をないがしろにする者だとされ、少数の親しい人たちだけが彼の考えに理解を示すだけであつた。だが、うわさを聞いたライブニッツが、遠くドイツから、世界を観るレンズの研磨師に会うため下宿屋を訪れたという。人間の知は前進しつつあつたのである。『エチカ』は、生前日の目を見ず、死後に出版されたものの禁書になつた。著者の名は記されなかつたという。それは、当局の追求を逃れるためだけでなく、真理を人の目に触れるようにした人物の名をそれに結びつける必要はないという考えに沿うものだつたそうだ。まことに見習うべき徳の人である。

善や徳を説く言葉をまたたくさん抜き書きしたが、その一つだけここに記してみよう。「理性に支配される人間、言いかえれば理性の導きに従って自己の利益を求める人間は、他の人々ためにも欲しないようなかなることも自分のために欲求することがなく、したがって彼らは公平で誠実で端正な人間であることになる」。前後にも同じ趣旨の文章があるが、この言い方はとくに、よく知られたカントの言葉に近い。理性のなしうることをつき詰めて考え、理想を遠くに見つめる二人の言葉は無縁ではないだろう。ヨーロッパで、カントの表現がある程度なじみのある言葉だったとも聞く。それを単なる高尚な言葉として聞くのではなく、本当にそのように生きた哲人がスピノザとカントだった。

「正しく行ない、自ら樂しめ」、四十四歳で死んだ賢者が七十の老人に呼びかける。